
論説

現代世界におけるパチャママの二面性

岡 本 年 正

1. はじめに

昨今、パチャママ (*Pachamama*) と呼ばれるアンデスの民間信仰における大地母神が、アンデス地域を越えて広く聞かれるようになってきている。それはラテンアメリカ世界に限った事ではなく、例えば日本（語）においても、インターネット上のウェブサイトにも、パチャママに関するコラムや論文の翻訳などが散見される¹⁾。また、民間信仰という枠組みを超えて、環境保護の文脈で言及されたり、その延長ともいえる形で、法律の中にも登場したりしている（後述）。それらは、世界的な事象との関連の中で語られており、パチャママが一つの共通語として表出しているともいえる。

一方で、現代のアンデス高地においては、農村部においても都市部においても、地域的な民間信仰の文脈において、パチャママは変わらず重要な存在であり続けている。伝統的な信仰におけるパチャママは、世界的な流れの影響を受けつつも、アンデスにおける「神」として崇拝の対象であり続けている。

パチャママという地域的な信仰の対象であったものが、世界的な広がりを持つという状況は、現代における諸問題との関わりの中で醸成されてきている。特にパチャママとの関わりであれば、環境問題や先住民の権利問題などと深くつながっている。このような状況を鑑みると、アンデスの民間信仰を研究することは、ひいては世界的な問題の根

1) 例えば、*The Midori Press*（「生物多様性オンラインマガジン」）において、アルゼンチンのビアナ・ヴィラ博士の論考が日本語で掲載されている（論考自体が翻訳されたかどうかの明記はない）。https://www.aeon.info/ef/midoripress/jp/column/20151105_post_27.html（2024年8月25日最終確認）。その他には映画でも、2009年に日本で劇場公開された、松下俊文監督の『パチャママの贈りもの』がある。

源を理解することにつながると言える。その一つの準備段階として、現代においてパチャママがどのように認識されているかをまとめておくことは、重要なことと考える。よって本稿では、現代のパチャママの在り方について大まかにまとめ、パチャママとパチャママを取り巻く環境を、歴史的、民族学的、社会・政治的な側面から考察する。このことを通して、パチャママが本来持つ性質と、現代世界がパチャママに求めていることとの相違、もしくは現代世界におけるパチャママの扱いの恣意性が明らかとなるだろう。

2. パチャママを取り巻く現状

2.1 パチャママとは

パチャママとは、大まかに言って、アンデス世界で最も重要な神格の1つであり、女性性を持つ大地の神である。大地の神格ということから、「大地の母」(La Madre Tierra) と呼ばれたり、「聖なる大地」(Santa Tierra) を枕詞とし、「Santa Tierra Pachamama」と呼ばれたりもする。地域的な信仰として、基本的に、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリ、コロンビア、アルゼンチン北部のアンデス地域に広がっており、かつてのインカ帝国の版図との重なりを指摘することができる。

パチャママの呼称そのものは、ケチュア語に由来していると考えられている。Vitry は Alabí と Yánez Cossío を引用し、次のように説明している。*Pachamama* を *pacha* と *mama* に分け、*pacha* には「時間と空間」(tiempo y espacio) の意味があり、空間、時間、自然(生き物)、世界(惑星としての大地)、宇宙(普遍／宇宙的秩序)(universo [el orden cósmico]) を含意しているとする (Alabí 1996: 52)。また、パチャママは普遍／宇宙の母 (Madre Universo) であり、madre は創世＝糧＝保護＝導き＝愛情を、universo は時間＝秩序＝無限を意味しているとする (Yánez Cossío 1985)。そしてこれら全体を包含するような認識として、「生命を支えるために必要な自然的、物質的、象徴的な力の全てを携えている」としている (Vitry 2003: 232)。ある意味で、大地の神以上に、創造主のような認識がされているとも言える。

以上のような抽象的な意味合いを含みつつも、アンデスの人々にとっては、パチャママは具体的な崇拝の対象となっている。最も顕著な活動として、パチャママに捧げる儀礼があげられる。パゴ・ア・ラ・ティエラ (Pago a la tierra) (以降パゴ儀礼と記述) とスペイン語で表現され、「大地への支払い」と直訳できる儀礼である。そこでは大地＝パチャママに対して供物(ofrenda)を捧げる。パゴ儀礼は8月に活発に行われている。8月は乾期の終わり、つまり農耕を行う雨期が始まる直前であり、大地であるパチャママは「お腹を空かせている」状態と考えられている。人々は、この乾燥している大地＝

お腹を空かせているパチャママに、供物＝食事を与えることで、これまでの収穫に感謝し、これからの農耕における成功を祈願する。パゴ儀礼は個人、家族単位から地域大の規模で行われており、少なくともエクアドルやボリビア、ペルーのアンデス地域においては、パチャママ・ライミ (*Pachamama Raymi*)²⁾が8月1日に行政の主導で開催されている。

2.2 パチャママとパゴ儀礼に関わる産業

パチャママそのものの言語的な意味やアンデスの信仰との大まかな関わりについては上述したようであるが、パチャママの周辺にはパゴ儀礼だけでなく多くの活動が存在している。

商業的な点で言えば、まずはパゴ儀礼において、儀礼を主導するクランデーロ³⁾が、儀礼を行うことで儀礼の依頼者から手間賃を受け取っている。またパゴ儀礼に用いる供物であるデスパチョ (*despacho*)⁴⁾を販売する呪物店がある。その他、パゴ儀礼を組み込んだ体験型のツアー (ミステリーツアー) が行われている⁵⁾。

教育においては、祖先の教えを尊重する姿勢を織り交ぜながら、自然環境としてのパチャママが描かれている。パチャママを通じて、アンデスの伝統や習慣を教える一方で、昨今の環境問題に対して、またその環境を保全することに対する意識を喚起している。例えば、パチャママについての絵本には、パチャママに関するいくつかの短編を通して、パチャママに気を配る＝自然環境に気を配る (*cuidar*)、そして環境保全への意識を高めるとことが描かれている (Pucllasunchis 2008)。アンデスの子供たちは、小さいころからパチャママに関わって生きてきている。

2) ライミ (*Raymi*) はケチュア語で祭りを意味する。ライミと呼ばれる祭りは、南米3大祭りの一つに数えられる、ペルーのクスコで行われているインティ・ライミ (*Inti Raymi*) が有名 (インティはケチュア語で太陽の意) である。インティ・ライミはその名称から、太陽に供物を捧げているという意味合いになるが、実際の儀礼においては、パゴ儀礼と同様の形をとり、大地へ供物を奉じている。このことから、大地へも儀礼を行っているといえる。つまりインティ・ライミも、部分的にはパチャママへのパゴ儀礼と呼ぶことが可能である。

3) アンデスにおける伝統的な呪術師。パコ (*Paqo*) やヤティリ (*Yatiri*) とも呼ばれる。

4) 供物としてささげるもの一式がパッケージされた包み。但し供物となるものすべてが含まれているわけではない。デスパチョには入っていないコカの葉やポートワイン、カーネーションの花と一緒に、クランデーロによって作り上げられる (*armar*) ことによって供物となる (Okamoto 2013: 219)。

5) 呪物店ではデスパチョだけでなく、アンデスの民間信仰を実践するために必要なものが販売されている。クスコ都市部における呪物店の経済活動やクランデーロとミステリーツアーの関係については、拙稿を参照されたい (岡本2013, Okamoto 2022)。またボリビアのオルロにおける呪物店については、Sikkink に詳しい (Sikkink 2010)。

2.3 パチャママと法

ところで、冒頭にも述べたことであるが、パチャママという語がアンデス地域を越え、国家レベルにおいても取り上げられてきている。その最たるものとして、法律の条文の中でパチャママが言及されている。例えば、エクアドル憲法には「自然あるいはパチャママにおいて、命は生み出され自ら再生産する。パチャママの存在は、統合体として尊重される権利を有し、そのライフサイクル、構造、機能、そして進化プロセスの維持と再生産への権利を有する」(Cf. デ・ラ・カデナ2017: 47)と明記されている。またボリビアでは、2010年に法律071号 (Ley N° 071)「母なる大地の権利法」(Ley de derechos de la Madre Tierra)が制定され、第3章7条 (Capítulo 3. Artículo 7)に「生命に対して／生命の多様性に対して／水に対して／清浄な空気に対して／調和に対して／回復に対して／汚染にさらされずに生きることに対して」母なる大地が有する権利 (Derechos de la Madre Tierra)が宣言されている (Estado Plurinacional de Bolivia. Asamblea Legislativa 2010: 3)。

これらは、現在の環境破壊に対し、国家が環境保全にコミットする中でパチャママが組み込まれ、パチャママのために新たに制定された法律である。また同時に、先住民の信仰対象であるパチャママを導入することで、先住民の権利を守ること、そして先住民そのものの存在を積極的に認めることを国家が表明している。上記2つの国家は、これらの法を通して、多様な人々が存在し、現代的な状況としての多様性を認知し、その上での国家の在り方を示そうとしている。またここでの多様性は、先住民を含めた多様な人間社会という人間の枠組みの多様性だけでなく、自然環境そのものの存在も人間と同様に認め、人間の枠を超えた世界の多様性を認めていくことが示されている⁶⁾。

3. パチャママの広がり：個別性と普遍性

これまでに確認してきたパチャママとパチャママを取り巻く状況が、どのように醸成されてきたのか、そしてその結果に関して、3つの点から分析を行い考察を述べていく。まずは歴史的な点、次いで民族学的な点、そして社会・政治的な点の順に論じていく。

3.1 歴史的にみるパチャママの性質

冒頭に触れたように、パチャママの基本的な広がりにはアンデス地域である。これはイ

6) 人と自然という二項対立を超えた新たな世界の創造につながり、現代世界の閉塞的、終焉的状况を打破することに寄与するであろう (Cf. デ・ラ・カデナ2017)

ンカ帝国のかつての版図と重なるところがあるため、一見するとインカ帝国の宗教的活動の結果と言える。このことは部分的には正しいが、インカ帝国が始めた宗教であるかといえば、そうではないと考えられている。大地信仰はそれぞれの地方にそれぞれの神格とともに存在しており、インカが版図を拡大する中で、インカの手によって国家的崇拜対象となった。その中で、大地の恵みと出産というどちらも生み出すことを表現していることから、大地に女性的な性質が付与されていったとしている（シルバブラット 2001：44-45, 82-83）。またインカ帝国の統治の特徴の一つである、インカの宗教を信仰すれば、征服地古来の宗教は否定されることはなかったことにより、各々の大地信仰は各地で継続されていたであろう⁷⁾。

この女性性は、太陽や雷といった男性的な特徴を持つ天空の神々との対比で認識されており、パチャママは生殖力をつかさどり、男性性を持つ神は政治力をつかさどるとされている。これら神々の相互作用がインカ帝国における社会生活の再生にとって不可欠であり、神々の相補的な関係、もしくは互酬的な関係が世界の安定をもたらしていると考えられた（シルバブラット 2001：45-47）。

アンデス世界において互酬制は重要な概念であり、アンデスの人々同士の互酬⁸⁾は当然のごとく、人々と神々との互酬もまた存在している。それが人々とパチャママの間の互酬であり、パゴ儀礼によって表現されている。人々はパチャママ、つまり大地から毎年実りを受け取る一方で、その大地に、つまりパチャママに返礼として供物を捧げている。この供物が神々の食事であり、最近ではめったに見られないが、生きた動物の供犠や、かつては人身供犠も存在していた。発掘されるインカ期のミイラの一部は、人身御供として神々へ捧げられたものである。ミイラはケチュア語でマルキ (*malki*) と呼ばれるが、マルキは豊穡も意味することから、この互酬における供物としての意味がより強調される⁹⁾。

7) パチャママの呼称がインカ帝国で用いられていたケチュア語と考えられていることから、それぞれの地域に存在した大地信仰が、そもそもインカの人々が有していた大地信仰に統一され、現状となっている可能性がある。とはいえ各地方における大地の神の呼び名は不明なままであり、少なくともインカ期には、アンデス全域でパチャママと呼ばれていたことだけがわかっている。

8) 特に労働における互酬の交換をアイニ (*ayni*) と呼ぶ。特徴としては、同様の労働をお互いにやり合う（交換する）のではなく、異なる種類の労働を提供し合う。ある種の不均衡を常に維持しておくことにより、互酬の義務が発生するような形で、社会関係を維持していると言える。

9) インカ時代には、人身供犠の儀礼、またその犠牲にされた人そのものを、カパコチャ (*capacocha*)（スペイン人が到達したのちから残された記録であるクロニカにおいては、*capacocha* だけでなく *capaccocha* や *capac cocha* と綴られている）と呼んだ。*capac* は「王」を、*cocha* は「湖や水の集まり」を意味し、特に豊かさや生産力としての水との関わりから豊穡を求めるための人

またパチャママはその女性性との兼ね合いから、聖母マリアとシンクロしていったことが指摘されている。インカ帝国がスペインに征服されて以降、カトリックの布教と強制的な改宗が行われた中、大地信仰の要素がアンデスにおける聖母マリアの表象に融合されていった。大地＝パチャママとしているが、部分的な大地としては、山の神アプ（*Apu*）やアチャチラ（*Achachila*）が存在している。アンデスにおける聖母像の多くが、その山を模したように、裾が広がったローブを身に着けている。像だけでなく絵画においても同様に表現されており（Gentile Lafaille 2012）、例えばクスコのカテドラル内の絵画にも確認することができる。

しかしここには矛盾が一つ存在している。山の神であるアプやアチャチラは伝統的に男性性を帯びた存在であり、聖母像が山そのものを表現しているとする、山の神の男性性を表現しきれない¹⁰⁾。しかしながらここで大地母神としてのパチャママを考慮に入れると、山も大地の一部であり、パチャママの女性性を介して聖母像に山（の神）が内包されるということが可能になる。ここにおいてみられるのは、アプやアチャチラのよように各々の山の名前で呼ばれる個別的な存在とは異なり、パチャママは大地全体を象徴することができる普遍的な存在ということである。

3.2 民族学的にみるパチャママの性質

農村部でも都市部でも、アンデスの人々がパチャママを最も意識する時期は、先述の通り8月であり、パゴ儀礼を行うときである。この時期は、呪物店に多くの客が訪れ、供物の元となるデスパチヨを買い求める。デスパチヨは呪物店によって若干の違いがあり、クランデーロはどの呪物店のデスパチヨを使うかを決めている場合が多い。とはいえ、パチャママに対して備えられる供物の基本的な要素は同じものである（岡本 2013：222-224）。

身供儀であった（Reinhard & Ceruti：6）。このように、ミイラと豊穡の関係は、インカ時代からも見ることができる。

- 10) アンデスの多くの人々の認識として、インタビューを通じてわかることは、アプやアチャチラは男性神であるということである。しかしながら少なくともアプに関しては、女性神のアプも報告されている。例えばクスコ都市部近郊に座するママ・シモナ（Mama Simona）山は、女性性を持つアプとして存在している（Bolívar Yapura 2015）。このアプは、2017年にクスコ都市部でフィールドワークを行っていた中、あるクランデーロから初めて聞かれた。このクランデーロは、ママ・シモナ山で観光客とともにパゴ儀礼を行っていた。その頃から、新型コロナでの外出規制時を除き、ママ・シモナ山を行政区に含む役所が、現地に人々を招待する形で8月1日にパゴ儀礼を行うようになった。近年のパチャママとの関係が影響している可能性もあるため、山の神の男性性／女性性は、継続して考察を行っていく必要がある。

それでは、実際のパゴ儀礼において、パチャママはどのように捉えられているのかを見てみよう。パゴ儀礼自体はパチャママに供物を捧げるという形である。しかしそもそもパゴ儀礼においては、供物を備える対象はパチャママだけではない。クランデーロが山の神であるアブやアチャチラの個別の名前を呼んで招待する（invitar）のが習わしであり、結果として、パチャママ、アブやアチャチラに供物を捧げていることになる。儀礼において、供物を作り上げる過程で山の神が招待され、出来上がった供物は、あらかじめ地面に掘られた穴に燵をしつらえておき、その燵の上に置かれることで供物が燃されていく。供物は焼かれることによって、大地と山の神々に届けられることとなる。焼ける際に出る煙は山の神に、燃えた後の灰がパチャママに捧げられたことになる。燃えている間は神々が食事をしていることと同義であり、人々は燃えている過程を見ることを避けるべきだとされている。そのため、供物が燃えているのを直視することはまずないが、近くで談笑をして待っていたり、そのままその場を離れたりする。パゴ儀礼は基本的に夜に行われ、深夜零時に供物を燵にくべるのがよいとされている。そして次の日に、燵と供物の灰を一緒に穴を埋める（tapar）。灰を埋める際に供物が燃え切っているかどうかを確認し、燃え切っている場合は神々に受け入れられたとし、燃え残りがある場合は神々に受け入れられなかったとされる¹¹⁾。

供物を作る過程において、コカの葉3枚とカーネーションの花弁1から数枚を一緒にしたもの、クランデーロが祈りを唱えつつ供物の一部として置いていく（パゴ儀礼において最も時間のかかる工程である）。その祈りの工程の中で山の神の名を唱えて招待するのであるが、クランデーロやパゴ儀礼の依頼者が知っている山（の神）の名前を唱え終わると、次いで遺跡や歴史的に重要な場所の名称を唱え、そして自らが住む場所の住所や、その場所に特別な名前を付けていればその名前を、同様に仕事場（オフィスや畑などその職種は問はない）や勉強をしている場所（学校名やその学校のある通り名など住所の一部）を唱え始める。大地という意味においてパチャママの一部であるが、それぞれの土地の個性が強調される。

また、特に仕事場がそうであるが、そこが畑であれば大地と直接関わりがあるが、オフィスとなると、大地との関わりはほとんどなくなってしまう。しかしある種の恵みを生む場所というつながりの中、パチャママにその恵みを感謝しつつ、継続的な恵みを求める。つまり経済的な利益を求める相手がパチャママとなる。ここでは大地との関わり

11) 供物が置かれている燵が弱まらないように薪を足していくことで、燃え残りがないようにするのが常である。たとえ燃え残りがあっても、わずかであればあまり気にされず、そのまま埋められる。

がなくとも、神と人との互酬が普遍的な意味を持ち立ち現れている¹²⁾。

産業との関係においては、例えば先述したミステリーツアーが成立する一つの要因として、パチャママに対する共通理解が存在していることがあげられる。パチャママは個別的に言えばアンデス地域の神であるが、大地と読み替えれば、大地を信仰するという世界的な広がりでの理解が可能であり、パチャママがアンデス地域を越えた普遍性を持つに至る。特にミステリーツアーに参加する多くの人々が、スピリチュアルな体験や関係を求めていることもあり、この普遍性と相まって、大地＝パチャママとして問題なく受け入れられている (Okamoto 2022 : 137-138)。

このようなスピリチュアルな対象としてだけでなく、パチャママは大地＝自然環境ともみなされている。ミステリーツアーにおいて、大地を崇拝するという高尚さまでいかなくても、大地を大切に思う、そして自然環境を大切に思うことにより、パチャママを自然環境として受け入れることが起きている。ここではパチャママは、大地を超えた自然全体を表象している存在となっている。先述のアップとの関係で言えば、この自然全体ということで、パチャママはその女性性だけでなく男性性も含みこんだ普遍的存在と言える。

このことは、教育においても言えることである。先述した絵本における例であれば、パチャママを大地だけでなく自然環境全体に昇華することで、環境保全という普遍的価値とパチャママがつながる。子供たちは普遍的なパチャママを通じて世界的な問題とつながる一方で、自らの住む地域のパチャママという具体性かつ個性のおかげで、世界的な問題を身近に感じることができ、それらに対する理解を得ている。この個性は、パチャママという祖先からの教え、伝統・慣習につながることであり、自らの文化の一部として継承していくこととなる。パチャママは新たな世代の中で再生産されていく。これらのことは、世界の多様性を担保するためにも重要なことである。

このような現代的なパチャママには、豊穡や自然環境をつかさどる肯定的なイメージが付帯している。絵本におけるパチャママも、守られなくてはならない（現状は）脆い自然環境として描かれてきている。絵本『Pachamama』の中に「パチャママを大切にしよう」(Cuidemos a la Pachamama) の見出しでパチャママが描かれているのは、最たるものである (Pucillasunchis 2008 : 68-75)。パチャママが大地を超えて、愛でる対象としてより受容されやすい姿で描かれている。

しかしながら、実際のアンデス地域において、パチャママはこのような肯定的な存在

12) 富の追求、大きくは資本主義経済における大地とパチャママの乖離に関しては、別の機会に議論したい。デスパチョを事例とした分析は拙稿を参照 (Cf. 岡本2013)。

としてのみ受け入れられているわけではない。確かに、絵本において守護者として描かれたり、実際の儀礼において「母なる大地」として崇拝の対象であったりするが、否定的な側面も有している。そのことがよくわかる事例が、民族病の一つであるススト(susto)である¹³⁾。

アンデスにおけるスストは、印象の強いことが起きたり驚いたりした際（例えばベッドから落ちる、交通事故に遭うなど）、体から魂が抜け、それが起きた場所の大地がその魂をつかんでいる（agarrar）とされる。魂が体から出ている状態では、その人物は衰弱していき、最悪の場合は死に至る。つまり、大地が魂を捕らえていることが衰弱や死に至る原因であり、パチャママは否定的な存在として認識されることとなる。

一方で、絵本『*Hampiq Wawakuna*』（ケチュア語で『伝統医療者の子供たち』の意）に収められている「El abrazo de la Pachamama」（パチャママの抱擁）においては、スストの原因となっているパチャママは守護者として描かれている¹⁴⁾ (Coavoy Granada 2015: 33-34)。話を要約すると、次のようである。

ある日、パブロ少年が木登りをしている最中に木から落ちてしまい、そこから回復せず衰弱していった。そこにクランデーラが訪れて「パブロはスストであり、彼の魂は事故の際に体から出て、その魂をパチャママが悪い精霊から守るために抱きかかえてくれている（la Pachamama abrazó el ánimo de Pablo）。そのため、パチャママに供物を備えて魂を返してもらうことが必要」と告げる。パブロの母親（父親は信じていなかった）がクランデーラに儀礼を頼み、儀礼や治療が行われ、パブロ少年は元気になった。彼の父親もパチャママを信じるようになり、常にパチャママに供物を捧げるようになった（Coavoy Granada 2015）。

この逸話では、大地＝パチャママが魂をつかんでいることを、パブロ少年の魂を悪い精霊から「守る」（proteger）ためにというように、肯定的に表現している。また最終的に、パチャママを信じることの重要性が間接的に語られ、暗に伝統や慣習を尊重すべ

13) スストは広くラテンアメリカ世界に存在しており、またアメリカ合衆国におけるラティーノの間でも見られ、ストレスによる精神的な病気として扱われる（Cf. Rubel, O'Neill & Collado-Ardón 1984: 6）。またクランデーロが扱う民族病の中ではかなり一般的なものであり、特殊な事例ではない。

14) この絵本は伝統医療者からの話で構成されており、「El abrazo de la Pachamama」を語ったCoavoy Granada自身も、伝統医療者である。そのため、民間信仰においてスストがこのように語られることもあるのかもしれないが、本文後述との繰り返しになるが、少なくとも筆者のフィールドワークでは聞かれることはなかった。絵本向けに改変されている可能性がある。

きことが示されている。

しかしながら、筆者のフィールドワーク中に会ったスストに関係したインフォーマントから、パチャママが魂を「守る」という表現を聞いたことはなく、むしろ上述の通り、大地に捕らえられているという否定的な発言を何度も聞いた。そもそもスストになると、衰弱していき死に至ることもあると考えられている中で、魂を「守ってくれている」という表現は、実際にスストが起きている状況下で苦しんでいる人々にとっては受け入れがたい。ここでは大地＝パチャママは、供物を要求しているのであり、供物を忘れている人々への戒めともいえる。そして現実では、否定的な側面から伝統や慣習の重要性が認識されることになる。スストに関する語りにおいてパチャママの肯定／否定的という二面性がよく現れており、なおかつ誰に対して誰が語るか、何のために語るか、また実際の経験か知識かという点において、その二面性が取捨選択されていると言える。

3.3 社会・政治的にみるパチャママの性質

上述の絵本のように、パチャママは、その普遍性と肯定的側面（のみ）が描かれることで一般に受け入れられ、同時にその個別性から、先住民性が強調された文化として受容される。その延長に、法の中にパチャママが組み込まれていくことがあると言える。

ここで目指されているのは主に二つのことである。一つはパチャママや大地、そして自然環境自体に主体性を認めることである。対象としての自然環境ではなく、主体としての自然環境であり、私たち人間と同様に世界に対して権利を有していることである。もう一つはパチャママを通して、広く先住民の権利をこれまで以上に認知していくことである。

前者に関しては、パチャママの主体性を認めることはパチャママの権利を認めることにつながる。つまりパチャママが私たちと世界を共有する存在であることを「思い出す」ことである。ボリビアの「母なる大地の権利法」は明確に大地＝パチャママの権利を尊重することが目指されており、それら権利を尊重する結果として、環境保全につながる。実際には、法の中で掲げられた大地の権利を認識するよりは、喫緊の課題としての環境保全を実行する中で、大地＝パチャママの権利を認める、という構図であろう。

それ以上に、パチャママを主体として認めることは、自然を客体として扱ってきたこれまでの世界のあり方に変革をもたらすことであり、人間同士だけでなく、世界におけるあらゆる存在と共存するという意味での世界の多様性が認識されることとなる。このようにして、行き詰まりつつある現代世界に一石を投じる一つの方法となる。

またパチャママに対する考え方、もしくはパチャママを含んだ世界観を国家レベルで受容することは、パチャママを信仰する先住民にこれまで以上に光をあてることとなり、

必然的に彼らの社会的な立場を一層尊重することにつながる。パチャママの個性が、パチャママと同様に、パチャママを信仰する先住民の主体性を明確にしている¹⁵⁾。

以上より、社会・政治的には、パチャママは肯定的な要素として受容されつつある。しかしいずれの場合も、パチャママ本来の地域的な側面としての互酬的關係を捨象している。パチャママと人々の関係は、互酬的な関係で結ばれている。これはアンデスにおいて重要な規範であり、外すことはできない要素である。パチャママに対して、人々には与えること／返礼することをしなければ、パチャママは人々から奪う、つまり災厄をもたらす。毎年パゴ儀礼を行う人々が常に成功を収めているかということ、当然ながらそのようなことはない。パゴ儀礼をするも良い年にならなかった人々から頻繁に聞かれる言葉は、「パゴ儀礼がうまくいかなかった」「パチャママに供物をきちんと与えることができなかった」「パチャママは供物を受け取ってくれなかった」というものである。パチャママは乾期に腹を空かせるのではなく、腹を空かせることで乾期になり実りがなくなる。そして上記3つ目の発言のように、パチャママは「気まぐれ」でもある。たとえ供物を与えたとしても、それを受け取らないこともある。互酬にならず、一方通行になる場合もある。

それらを考慮に入れて再び社会・政治的なパチャママの認識を鑑みると、先述の絵本におけるスストでのパチャママのように、パチャママの「受け入れたい」側面だけを強調してはいないだろうか。パチャママの権利を認めるとすると、与えることをしなければ人々から奪う、たとえ与えても答えることがないこともあることまで受け入れなくてはならない。確かにパチャママの権利を認めそれを具体的に尊重することができれば、結果的に人々はパチャママに支払い／パゴをしていることになるかもしれない。しかし現状では、パチャママの「畏れるべき」側面を考慮しているようには見えない。本来的なパチャママを受け入れていないとすると、政治によるパチャママの利用であり、先住民文化のコントロールであり、先住民を主流社会へ統合することにつながってしまう。これは世界の多様性を認識し維持していくこととは真逆であり、避けなくてはならない。

おわりに

これまで、パチャママが現代においてどのように認識され、またパチャママの周辺でどのようなことが起きているかをまとめ、筆者のフィールドワークから得られた情報を

15) もちろんアンデスの先住民だけに脚光を当てるのではなく、より抽象化した「先住民」全体に注目することを目指している。

交えつつ、歴史的、民族学的、社会・政治的に分析・考察してきた。そこで出てくるパチャママは、地域的な神という個別性だけでなく、大地、そして自然そのものとみなされる普遍性を備えた存在であった。一方で、パチャママは大地であり、自然環境であると読み替えが行われ、パチャママ本来のアンデス地域の意味合いが捨象され、普遍的な存在として、そしてその肯定的な側面のみが扱われてきている。パチャママの主体性を認めて権利を尊重しようとする、人間との互酬的な関係や、パチャママ自身が「気まぐれ」であるといったことをも考慮に入れなくてはならないが、それらの側面は捨象されている。アンデスの人々にとってのパチャママ信仰は、スストの事例からも分かるように、パチャママに対する「畏怖の念」を含んだものである。

パチャママの個性を、特に畏れるべき側面を捨象してパチャママを受容することは、都合の良い普遍性だけを利用していることになる。アンデスの民間信仰であるパチャママを通して、アンデスの文化が主流社会に吸収・統合されることにつながり、最終的には、アンデス世界が国家のコントロール下に置かれることになるだろう。世界の多様性を目指しているはずの法でさえ、目指すところとは逆行し、パチャママを利用して先住民世界を主流社会に統合するだけに終わってしまう。

このように、パチャママが置かれている状況は、現代社会における問題を含みこむ一方で、逆説的にその問題を解決する糸口となる可能性も有している。全体としてのパチャママ、そしてありのままの先住民文化を受容すること、つまり取捨選択するのではなく肯定的な側面も否定的な側面も、先住民の視点ごと、さらには先住民の視点でもっていずれもそれとして受け入れることで、世界の多様性が本来的な意味で認識されうるだろう¹⁶⁾。現代世界の状況を考察する一つの視点として、今後もパチャママとそれに関わる状況に注目し、分析・考察を継続していくことは有益であると考え。

参考文献

- Alabí, A. (1996). La tierra en la ciudad o "Pachamama, bendecime el auto". In Guzmán, F. et al. (eds.) *Entre el cielo y la Pachamama*. (pp.49-83). UILL, Universidad Nacional de Jujuy.
- Bolívar Yapura, W. (2015). Mama Simona: Memoria ancestral y contemporánea. *Arqueología y Sociedad*. 30: 289-314.
- Coavoy Granada, D. (2015). El abrazo de la Pachamama. In Dirección Desconcentrada de Cultura de Cusco ed. *Hampi wawakuna*. Willanakuy.
- デ・ラ・カデナ、マリソル. (2017). 「アンデス先住民のコスモポリティクス——『政治』を超えるための概念的な省察」『現代思想』45(4): 46-80.

16) 「他者を真剣に受け取る」(Cf. インゴルド2020) 姿勢を持ち、近年(2010年以降)、文化人類学で隆盛しているマルチスピーシーズ(Cf. 奥野2022)の視点から考察することで、より発展的な議論を行えると考え。これらの議論は別の機会に譲りたい。

- Estado Plurinacional de Bolivia. Asamblea Legislativa. (2010). Ley de Derechos de la Madre Tierra, Ley N° 71 del 21 de diciembre del 2010. Gaceta Oficial del Estado Plurinacional de Bolivia.
- Gentile Lafaille, Margarita E. (2012). Pachamama y la coronación de la Virgen-Cerro. Iconología, siglos XVI a XX. Advocaciones Marianas de Gloria. *Simposium* (XXª Edición): 1141-1164.
- インゴルド、ティム (2020).『人類学とは何か』亜紀書房.
- 岡本年正 (2013).「資本主義経済におけるアンデス高地の民間信仰——供物としてのデスパチヨの事例」『超域文化科学紀要』18: 207-235.
- Okamoto, Toshimasa. (2013). Despacho como un punto de vista para comprender curanderismo. *Tinkuy* 1: 212-222.
- Okamoto, Toshimasa. (2022). Circunstancias actuales de la creencia andina en la industria mágico-religiosa con la presencia de los q'eros. In Flores Nájjar, E. Z., & M. H. Romero Pacheco (eds.). *Jorge A. Flores Ochoa: Notas exegéticas y Testimonios*. (pp.133-161). Municipalidad Provincial del Cusco; Qosqo T'ikarnamapaq; CEAC.
- 奥野克己 (2022).『絡まり合う生命——人間を超えた人類学』亜紀書房.
- Pucllasunchis. (2008). Cuidemos a la Pachamama. In *Pachamama*. Asociación Pukllasunchis.
- シルバーブラット、アイリーン. (2001)『月と太陽と魔女——ジェンダーによるアンデス世界の統合と支配』岩波書店.
- Reinhard, Johan, & María Constanza Ceruti. (2010). *Inca Rituals and Sacred Mountains: A Study of the World's Highest Archaeological Sites*. UCLA Cotsen Institute of Archaeology Press.
- Ruben, Arthur J., Carl W. O'Neill, & Rolando Collado-Ardón. (1984). *Susto, a folk illness*. University of California Press.
- Sikkink, Linn. (2010). *New Cures, Old Medicines: Women and the Commercialization of Traditional Medicine in Bolivia*. WADSWORTH, Cengage Learning.
- Vitry, Christian. (2003). Fiesta nacional de la Pachamama: El ritual de alimentar a la tierra. In Lacana, G. C., & Juana A. Norrild (eds.) *Gastronomía y turismo: Cultura al plato*. (pp.227-244). Centro de Investigaciones y Estudios Turísticos.
- Yáñez Cossío, C. (1985). Elementos de análisis quichua en matemáticas. *Cultura: revista del Banco Central de Ecuador* 7(21): 391-420.

映像

- 松下俊文 (監督) (2009).『パチャママの贈りもの』(映画) ゼリアエンタープライズ.